

## 東京のウォーターフロントにおける余暇文化の変遷に関する研究 —海水浴場を中心として—

### A Study on Changes Culture of Leisure in Waterfront of Tokyo —In the Point of View on the Sea Bathing—

○武田知大<sup>1</sup>，横内憲久<sup>2</sup>，岡田智秀<sup>2</sup>，寶泉立夫<sup>3</sup>，松本真奈美<sup>1</sup>

1. 研究目的—かつて産業空間に占拠されていた東京のウォーターフロントにおいて、多くの都市生活者は、余暇を過ごせる機能を抱合することを望んでいる。そのため現在は、公園や人工海浜などが相次いで整備されており、今後もウォーターフロントでは余暇機能を核とした整備が進められると考えられる。こうした整備計画を策定するにあたって重要となるのは、近代以降の東京のウォーターフロントにおいて、余暇文化がどのような変遷をたどってきたのかを捉え、その延長として、今後のウォーターフロントにおける余暇文化の方途を探ることである。

そこで本研究では、東京のウォーターフロントを対象に、近代の余暇文化の象徴である「海水浴場」に着目して、その形成過程を捉えることを目的とする。

2. 研究方法—本研究では東京のウォーターフロントに「海水浴場」が現出した明治期以降の東京を対象に、新聞や区史をはじめとする資料・文献<sup>1)~24)</sup>から、その空間の形成過程や波及状態を捉えていく。

3. 結果および考察—表-1 は資料・文献より捉えられた明治期以降の東京のウォーターフロントにおける余暇文化に関する事象を時系列で整理したもので、それらの空間的位置を表したのが図-1 である。

#### (1) 海水浴場の現出 (1891~1916 年頃)

潮干狩りや月見といった余暇文化がみられた東京のウォーターフロントに「海水浴場」が開設したのは、1891(明治 24)年のことである(表-1)。当時、久我邦太郎によって開設された大森海水浴場(写真-1)<sup>1)</sup>は、東京の外縁に位置し(図-1)、小屋掛けの脱衣所を備えたものであった<sup>2)</sup>。さらにこの地域では、1902(明治 35)年に穴守線を開業した京浜電鉄(現:京浜急行)が利用客増加を図り、同年に穴守海水浴場、

1909(明治 42)年に羽田海水浴場(写真-2)を開設した<sup>3)4)</sup>。その後、「近來漸次繁榮するに至れり。是は交通の便利第一の基因にして。海岸東海道には砂風呂、海水浴場等あり」<sup>5)</sup>と述べられたことから、付近に東海道線「大森駅」や京浜電鉄「八幡駅」があったことと、砂風呂など、独自の余暇文化が栄えたことが、この地域の発展を促したといえる。そして、大森海水浴場と「八幡駅」を結ぶ八幡通りは、町民、森ヶ崎鉱泉の客、海水浴客と多くの人でにぎわい、区内最初の駅前商店街へと発展を遂げた<sup>6)</sup>。

このように、個人の開設を契機に東京に現出した「海水浴場」は、民間の鉄道会社が開設したことにより集積し、周辺地域の発展を促したといえよう。

#### (2) 海水浴場の波及 (1917~1930 年頃)

この時期になると、「海水浴場」が都心を越えて月島・深川地域に波及しはじめる(図-1)。月島では、1917(大正 6)年に月島海水浴場が開設され、市民に親しまれていた<sup>7)</sup>。また、砂町には、砂町海水浴場が 1924(大正 13)年に地元青年団主催のもとで開設され、「一日の入場者を調べて見るに三萬百六十四人なり」<sup>8)</sup>と、多くの人々が訪れていた。そして昭和期に入ると、1928(昭和 3)年に開設した台場公園が夏季には海水浴客でにぎわい<sup>9)</sup>、しだいに料理屋、宿泊などの施設もそろったことで、盛況を呈した<sup>2)</sup>。

このようにこの時期になると、都心郊外に位置していた「海水浴場」が都心近郊に波及し、その周辺地域は、料理屋や宿泊施設が整備され繁榮していった。

#### (3) 海水浴場の衰退 (1931~1950 年頃)

1930 年代になると、「海水浴場」が衰退しはじめる。例えば、東京で初の「海水浴場」が現出した大森・羽田地域では、穴守が軍事工業地区へと転化<sup>3)</sup>したこと

1 : 日大理工・学部・海建 2 : 日大理工・教員・海建 3 : 日大理工・院・不動産

表-1 東京のウォーターフロントで捉えられた余暇文化の変遷

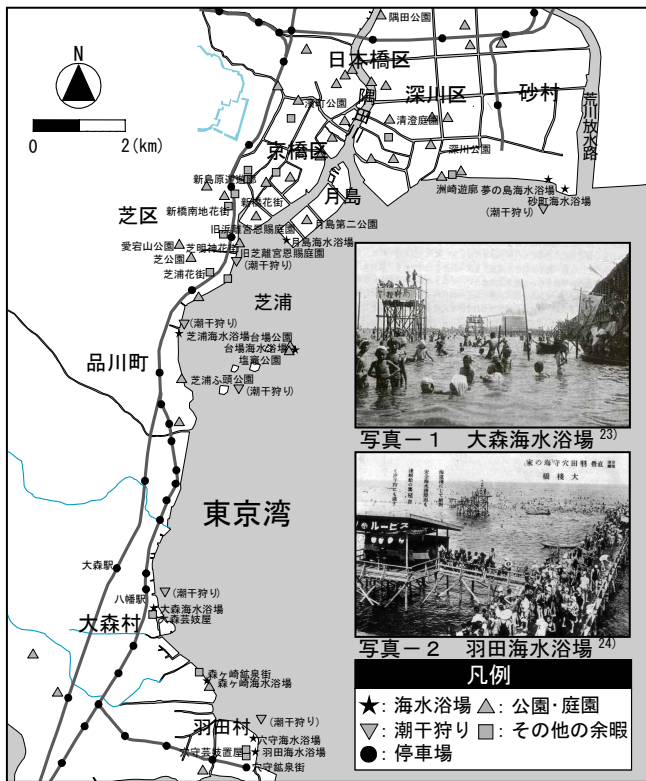
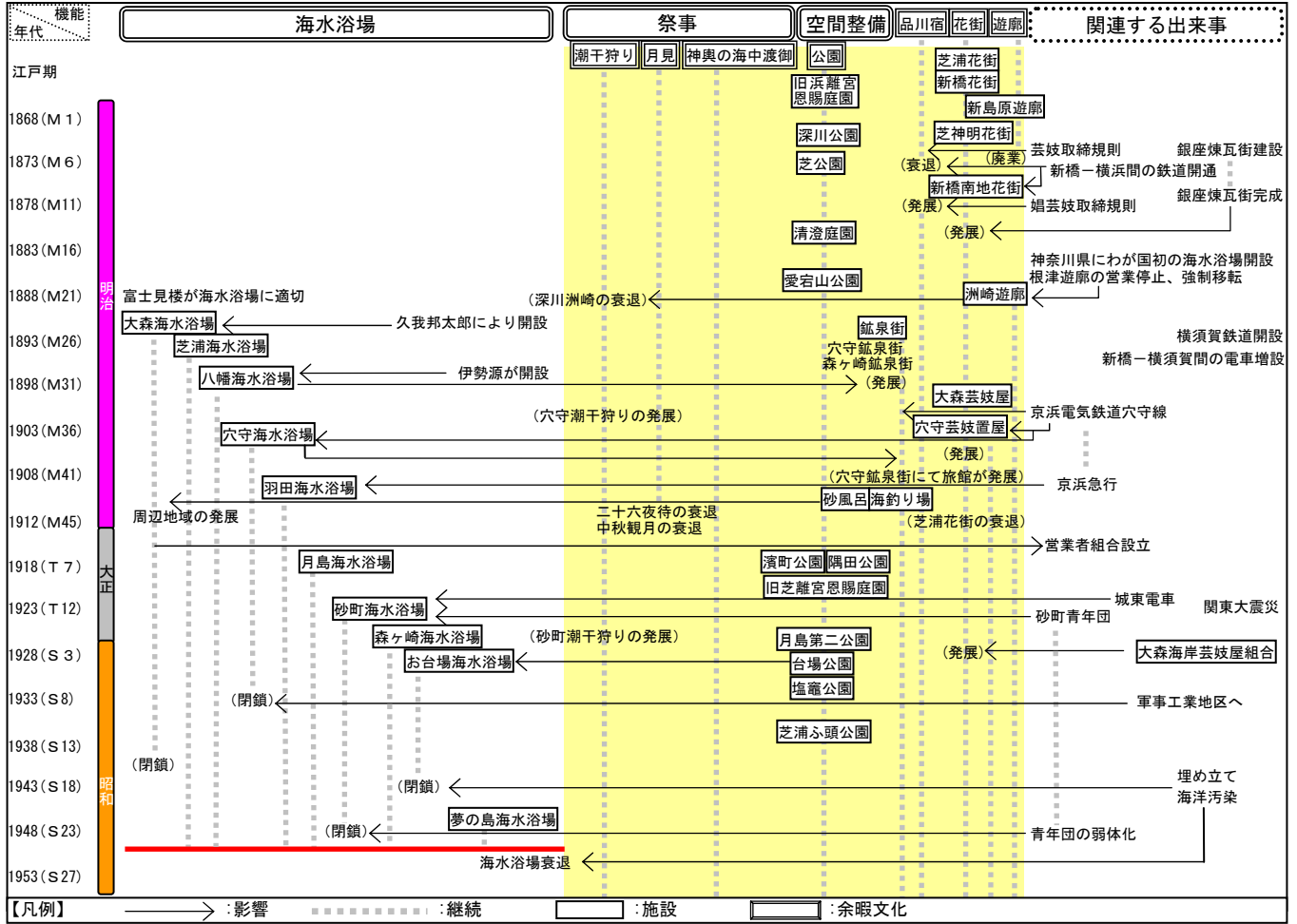


図-1 東京のウォーターフロントで捉えられた余暇文化の位置図

を要因に、また、他の地域では埋め立てと海洋汚染により衰退していった。さらに、1947(昭和 22)年に開設された夢の島海水浴場に至っては、台風と財政難によりわずか3年で閉鎖され、「東京港としては最後の本格的な海水浴場が消滅した」<sup>10)</sup>と記された。

以上をふまえると、約60年に渡る長い間、東京のウォーターフロントにおける余暇文化の中心として、周辺地域の発展にも寄与してきた「海水浴場」は、この時期をもって衰退したといえよう。

【引用・参考文献】

- 1) 「入新井町誌」, 1927
- 2) 菊池利夫: 「東京港史」, 大日本図書株式会社, 1974. 9
- 3) 大田区: 「大田区史 下巻」, 大田区史編さん委員会, 1992. 3
- 4) 橋爪隆尚: 「羽田誌所初版」, 中央社, 1908. 12
- 5) 朝倉治彦・植田清文: 「明治東京名所図会上・下巻」, 東京堂出版, 1992. 9
- 6) 大田区: 「大田区の歩み」, 東京都大田区総務部広報課, 1970. 12
- 7) 東京都京橋図書館: 「中央区沿革図集【月島編】」, 人文社, 1993. 3
- 8) 藤田清: 「砂町誌」, 中央自治研究会, 1924. 9
- 9) 東京都港区役所: 「港区史 下巻」, 勝田印刷, 1960. 3
- 10) 江東区: 「江東区史 中巻」, きょうせい, 1995. 3
- 11) 東京都港湾局: 「東京港史 第1巻 通史」各論」, 東京都港湾局, 1992. 10
- 12) 菅英誌: 「江戸東京海事典」, 株式会社新人物往來社, 1991. 5
- 13) 東京都港区三田図書館: 「明治の港区」, 塚本製作所, 1966. 12
- 14) 東京都港区役所: 「港区史 下巻」, 勝田印刷, 1960. 3
- 15) 市古夏生・鈴木建一: 「新訂江戸名所図会」, 筑摩書房, 1996. 10~1997. 2
- 16) 東京都品川区: 「品川区史 通史編 下巻」, 東京都品川区, 1973. 3
- 17) 江東区教育委員会教育課: 「江東区の歴史」, 光陽印刷, 1976. 3
- 18) 東京都中央区役所: 「中央区史 下巻」, 大日本印刷, 1958. 12
- 19) 新倉善之: 「大田区の歴史」, 名著出版, 1978. 6
- 20) 朝日新聞社: 「朝日新聞 1~48 復刻版-明治編」, 日本図書センター, 1992
- 21) 朝日新聞社: 「朝日新聞[大正編]」, 縮刷複製版, 日本図書センター, 1988. 6~1991. 8, 2003. 2
- 22) 読売新聞社: 「読売新聞 縮刷版」, 日本図書センター, 1993. 12
- 23) 大田区立郷土博物館: 「復刻版博物館ノート」, 大田区立郷土博物館, 1999. 5
- 24) 京浜急行電鉄: 「京浜急行百年史」, 京浜急行電鉄, 1999. 3